

〈黒船〉言説の誕生

姫野華菜

はじめに

人口に膾炙された司馬遼太郎『竜馬がゆく』¹や、鳥崎藤村『夜明け前』²といった歴史小説、あるいは手塚治虫の漫画『陽だまりの樹』³等の幕末を題材にした物語で、「開国」の象徴として描かれるペリー来航船は、決まって「黒船」と呼ばれる。ここで〈黒船〉の本来的な意味を探るために、現代の意味を『日本国語大辞典』第二版で確認すると、

『日本国語大辞典』第二版

- ① 中世末期から江戸時代にかけて来航した欧州の船。船体が黒塗りであったことから明国、安南、シヤムなど唐船系の船と区別して呼んだのが始まりで、幕末期、蒸気船を含む西欧諸国の船艦の来航が頻繁になると、それらをも含めて西洋型全般の俗称として慣用された。

- ② 特に、嘉永六年（一八五三）に来航して開国をせまった、ペリー率いるアメリカの船隊をいう。
- ③ 黒塗りの椀を酒の杯として用いるときの称。

とあり、特に②では、ペリー (Matthew Calbraith Perry) 率いるアメリカの船隊を指すという。では、遡って明治時代にはどのように呼ばれていたのだろうか。明治二二〜二四年（一八八九〜九一）にかけて編纂された国語辞典である『言海』を見ると、

『言海』第二冊（明治二三年）「一八八九」

〔船体多クハ黒塗ナレバイフ〕中世、スベテ、南蛮等、諸外国ノ大船ノ称。

ここにはペリー来航船を指す意は示されず、〈黒船〉が南

蛮など諸外国の船の呼称で、その船体が黒塗りであることに由来していることが記される。キリシタン時代における西洋の船が浸水と腐食を防ぐために黒色のピッチを塗っていたことから、当時の南蛮船を〈黒船〉と呼んだ。それは以下の『日葡辞書』の記述でも裏付けられる。

Curofune. Embarcação breada como a Nao que vem da India.

(Curofune. クロフネ〔黒船〕インドから来るNao〔大型の帆船〕のようなピッチ塗りの船)

ここで問題なのは、『言海』を援く限り、明治二二年の時点において、〈黒船〉は中世末期の南蛮船のみを指す言葉であり、そこにはペリー来航船を指す意味は含まれていないことである。つまり、ペリー率いるアメリカの艦船をいつから〈黒船〉と呼んだのか、また、現在なぜペリーの船のみが〈黒船〉と呼ばれ、「開国」の象徴として眼差されるのか疑問が生じよう。そこで本論文では、〈黒船〉を巡るイメージの変遷に着目しながら、その歴史的経緯と背景を明らかにしたい。

一、近世における〈黒船〉

(1) 〈黒船〉の初出

目下、〈黒船〉という言葉の最も早い時期の用例として、豊臣秀吉が天正一五年(一五八七)に発布した「伴天連追放令」が挙げられる。その内容は、キリシタン宣教師に国外追放を命じたもので、ただし、ポルトガル船の来航は商売のことであるから許容し、仏法の妨げとならない限り、キリシタン国からの往来は自由であると規定したという⁴⁾。以下見てみよう。

定

一 日本ハ神国たる処きりしたん国より邪法を授候儀
太以不可然候事

一 其国郡之者を近付門徒になし 神社仏閣を打破之
由 前代未聞候 国郡在所知行等給人に被下候儀
者 当座之事候 天下よりの御法度を相守 諸事
可得其意処 下々として猥義曲事事

一 伴天連其知恵之法を以 心さし次第第二禮那を持候
と被思召候へハ 如右日域之仏法を相破事 曲事
候条 伴天連儀日本之地ニハおかせられ間敷候間
今日より廿日之 間ニ用意仕可帰国候 其中に
下々伴天連に不謂族申懸もの之ハ 曲事たるへ

き事

一 黒船之儀ハ 商買之事候間各別候之条 年月を経

諸事売買いたすへき事

一 自今以後仏法のさまたけを不成輩ハ 商人之儀ハ
不及申 いつれにても

いつれにてもきりしたん国より往還くるしからず

候条 可成其意事

已上

天正十五年六月十九日。

四条目に出てくる〈黒船〉の意味するところは、同時代である「天正十六年閏五月十五日付秀吉朱印状⁶」や「慶長十六年辛亥季秋日付家康朱印状⁷」といった朱印状、貿易に係る規則を定めた「天正十六年五月十八日付秀吉定書。」といった定書にもみとめられることから、〈黒船〉が貿易で往来する南蛮船を指すことが確認できる。

また、俳諧集『犬子集』（二六三三）にも「長崎へまかりてくろふねの入ざる年に」との題目で「雲のかゝる月や黒ふね空の海」と連句が続くものがみとめられる。月を「月の船」というところから、それに黒雲がかかったものを黒船と言い、黒い船体をもつ西洋の帆船が入港しないことを暗示したという。このように『犬子集』においても、船体

が黒色である西洋の船を表す言葉として〈黒船〉が使用されている。その後の流れを先に示しておく、正保四年（一六四七）のポルトガル船来航事件以降、〈黒船〉という言葉はほとんど用いられなくなり、西洋の船を指す表現としては「異国船」、あるいは「南蛮船」などという表現が大半を占めるようになる¹⁰。

ここでそのポルトガル船をめぐる一件について見ておこう。寛永一六年（一六三九）、日本の対外政策によつて関係が絶たれたポルトガルは¹¹、その再開を目的として貿易船二艘を正保四年に長崎へ派遣した¹²。ところが、幕府は直ちにその一行を捕らえた上、乗組員の内六一人を処刑したという¹³。それではこの一件を、大学頭林圀が幕府の命により編纂した対外関係史料集¹⁴「通航一覽」（一八五三序）には次の通り記されている。

正保四年六月廿四日、黒船二艘硫黄ヶ島の沖に来て碇をおろす、遠見番所より、早速此旨注進す、依て阿蘭陀人に、検使通詞差添旗合に遣す処に、二艘の黒船南蛮の印旗を指居、はた不都合に、阿蘭陀人其旨を言上す、依之再び検使通詞を遣して、御禁制の輩何ゆゑに來朝致せし哉と問ふに¹⁵

ポルトガル（ヤスペイン）と貿易を行っていた時代において、〈黒船〉という語は通航関係にある南蛮船を指していた¹⁶。しかし、このポルトガル船来航事件以降、〈黒船〉の語義は元のまま南蛮船を意味するとともに、前時代とは変わって「通航が禁じられた異国船」に対する不審の眼差しまで含んだ言葉に変化した可能性がある。林子平『海国兵談』（一七八六）において異国のロシア船を「黒船」と称しているのはその表れであろう¹⁷。

（2）ペリー艦隊の来航時の呼称

サスケハナ号をはじめとするペリー艦隊には浸水・腐食防止のためのチャンが塗られ、黒色の船体であったことが人口に膾炙しているため、来航当初から〈黒船〉と呼ばれていたように受け取られがちである。しかし、ペリー来航船の呼称を、同時代である嘉永六〜七年（一八五三〜五四）の資料に搜索してみたところ、まず、幕領である江戸、大坂、京都の町触には〈黒船〉ではなく、「夷船」や「異国船」とあった¹⁸。次に、地方に目をやると、例えば熊本藩では、ペリー艦隊に関する様々な情報を纏めた藩の記録「本牧表御警衛一卷」¹⁹にペリー来航船の記述が見られる。

六月十七日

一、去ル八日江戸差立候上之早打之御飛脚、今昼着、異国船内海江乗入候も難計候付、本牧辺より御人数被差出候段申来候事、但し委細者自筆状奥キ書之事、

これには、ペリーの船が「異国船」と書かれている。このように、中央政府である江戸幕府から藩が作成した公的な文書に〈黒船〉という語が使用されていないことが分かる。では、私的な記述においてはどうかであろうか。嘉永六年（一八五三）六月二二日に、浦賀奉行戸田伊豆守氏栄²⁰から在府奉行井戸鉄太郎（石見守弘道）へ送られた書簡には、以下のように「軍艦」とある。

一朝議紛冗一定仕間敷と奉存候、扱書翰一条一同御示之事にて愚論申上恐縮、ただし再案仕候二、何卒御返翰受取御申上候、当年中再渡可致、数艘之軍艦にて渡来之事候は、衆人の肝を洗ひ候事故、御触有之候而銘々覚悟為致度もの二ハ無之哉如何、〔中略〕

六月廿二日 戸田伊豆守 印

井戸石見守様²¹

また、同年九月に土佐藩士坂本龍馬が父坂本八平直足に宛てた手紙に、次のように記されている。

一 嘉永六年九月二十三日

父坂本八平直足あて

一 筆啓上仕候。秋気次第に相増候処、愈々御機嫌可
レ被_レ成_二御座_一、目出度千萬存

奉候。次に私儀無異に相暮申候。御休心可_レ被_二
成下一候。兄御許にアメリカ沙汰申上候に付、御
覧可_レ被_レ成候。先は急用御座候に付、早書乱書
御推覧可_レ被_レ成候。異国船御手宛の儀は先免ぜ
られ候が、来春は又人数に加はり可_レ申奉_レ存候。
恐惶謹言。

龍

九月廿三日²²

このように、ペリー来航船を表す言葉としては、「軍艦」
や「異国船」という語が用いられている。

さて、「国史問答」や、「和名部類」などの著作で知られ
る国学者の色川三中は²³、嘉永六〜七年にかけてペリーに
係る情報を収集した日記をものした。色川は国学者橘守部

に入門し²⁴、江戸に住んでいたことから、米國艦隊にまつ
わる最新の情報が日記に反映されていると考えられる。以
下がその記述である。

丑六月四日朝

昨三日七ツ時相州浦賀湊へ亜墨利加嘉ワシントウと申
処の異船四艘一時に入津仕、東浦賀御台場より凡五丁
程沖合に相掛り居候。内貳艘は蒸氣船と唱候車仕掛ケ
有_レ之、大筒も左右に有_レ之候²⁵

ここでは「異国船」と同義の「異船」や、「蒸氣船」とい
う言葉が用いられているものの、やはり「黒船」という語
は使用されていない。

次に、ペリーの乗った船が浦賀に渡来した様子を描いた
絵図を見よう。「米艦渡来記念図」(一八五四頃)²⁶や、
「海陸御固場所附」(近世末期)²⁷、「浦賀紀行図」²⁸などが
あるがいずれも「蒸氣船」とあり、その他「ペリー浦賀来
航図」(一八五四)²⁹には「異国船」と記されている。以上
のように、絵図においても「黒船」という言葉は管見の限
り認められない。

他方、『改正泰平鑑』、『ペリー来航関係瓦版綴』
(一八五三)、『外戎記聞』³⁰、「蒸氣船の図」³¹など庶民の情

報源であった瓦版に目を向けても、「黒船」という言葉は確認できない。

また、『異国船渡来記神州泰平鑑』³²は幕末に表題が付されたものであるが、題名に「黒船」でなく「異国船」という言葉を含んでいる。この言葉と同義である「異国船」をもってペリー艦隊を眼差しているものには「異国船帰帆之図并魚之図」³³があり、その他「火輪船」、「上気船」という呼称も見られる³⁴。以上のようなペリーの渡来を報じた瓦版は、何種類も同時期に発行されたという³⁵。瓦版が庶民の情報源であったことを勘案すると、ペリー来航当時に瓦版を目にした庶民は「黒船」ではなく、「蒸気船」や「異国船」といった呼称を使用していたと考えられる。また、江戸の町触書が瓦版にされたもので、ペリー艦隊が江戸内海に入ってきたときの合図や、その際に町火消が控える場所などが書かれた「〔異国船渡来に付江戸町火消駆付場所達書〕」³⁶には、「異国船」とある。よって、これより、公にも庶民にもペリー来航船は「異国船」と称され、「黒船」とは呼ばれていないことが確認できる。

以上、ペリー来航当時の資料を調査した限りにおいては、公の段階でも庶民の段階でも「黒船」という言葉は見当たらなかった³⁷。ペリー来航以前に「黒船」という言葉の初出があり、その船体が黒色であったにも関わらず、幕末に

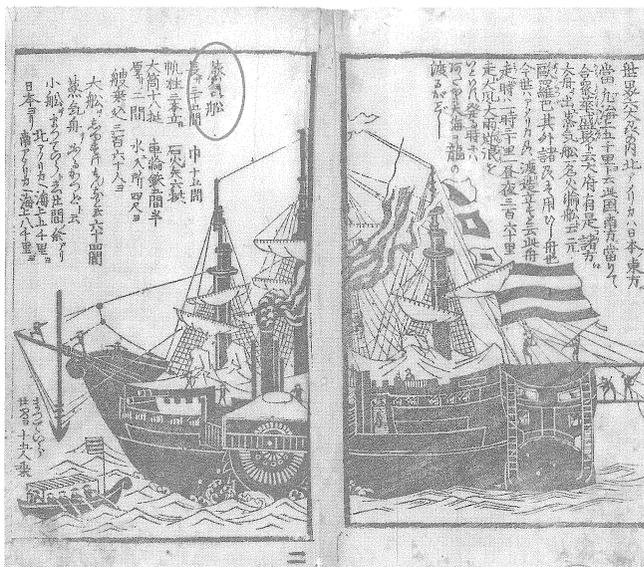


図1 『改正泰平鑑』(大島明秀氏蔵)、全7丁。折本仕立て。丸印部分に蒸気船という表記が見える。(丸印は筆者による)。



図2 「[[ペリー来航関係瓦版綴]]」(大島明秀氏蔵)、嘉永6年(1853)。実物とはかけ離れているが、これはペリー来航船(上)とペリー(左下)を描いている。

においては「異国船」や「蒸気船」等の言い方がなされ、「黒船」とは称されなかったのである³⁸。

なお、『海国兵談』（一七八六）において、「黒船」は望ましくないロシアの異国船という意を含む語として使用されていることは既に述べたが、さらに明治に入ってから『明六雜誌』の西周による論文³⁹や、明治二年（一八七九）七月四日付『朝日新聞』などに、国交や通商関係を持たない「異国船」を指す用例がみとめられる。これより、「黒船」という言葉はそれ自体が消滅した訳ではなく、語として水面下で浸透していたものと見ることができ。ただし、異国からの船や不審船を指す語としては圧倒的に「南蛮船」や「異国船」の方が多く、「黒船」が使用されるのは例外であったことには留意すべきである。そのことから、『言海』（一八八九〜九二）に「南蛮船」の意のみ示され、「異国船」の語義が無いものと目される。

正保四年のポルトガル船来航事件以降、『言海』の出版までの間における「黒船」の使用例は僅かであったが、一方、『言海』への掲載を得たことは或る程度認識を見た言葉であったと考えてよく、また、その場合の語義は、キリシタン時代の「南蛮船」であり、通航関係の無い国から来航した不審な「異国船」を指すものではなかったと言うことができる。

二、ペリー来航船と「黒船」

(1) 近代における「黒船」の描かれ方の系譜

ア 脅威としての「黒船」

少なくとも幕末・明治初期には一般的に使われなくなつた「黒船」という言葉が、特別な意味を含んだ用語として歴史叙述として現れるのは、明治二年（一八八九）刊行の『日本帝国史』が最初と目される⁴⁰。本書は、神武天皇即位以前の神代から、大日本帝国憲法発布までの歴史を記したものである。著者松井広吉は、明治一六年に新潟県長岡市に所在する越佐毎日新聞社の記者となり⁴¹、その後、中央新聞、万朝報、やまと新聞の記者を歴任した⁴²。また、これを校閲したのは帝国大学兼陸軍教授を務めた歴史学者内藤耻叟であった⁴³。該書において、「黒船」という言葉は、前述した『日本国語大辞典』②の、ペリー来航船のみを指す名称ではなかったようである。というのは、第四編第二章「黒船来航」という章で、以下のように説明されているためである。

第四編第二章「黒船来航」

使節ペリる軍艦四艘を率井テ浦賀ニ入り、通商互市ヲ請フ、①幕府諭シテ去ラシメントスレドモ聴カズ、兵ヲ擁シテ脅嚇ス「中略」八月露西亞ノ水師提督ペリー

やちん軍艦ニ搭シテ長崎ニ来リ、②通商ヲ求メ、且ツ樺太ノ境界ヲ確定セン事ヲ請「中略」五年正月ペリ再ビ六艦ヲ率井テ来リ、本牧ノ答書ヲ求ム、其ノ副將あだむす③進ンテ神奈川ニ泊シ、直チニ江戸ニ入テ事ヲ決セントス、幕府之ヲ止ム、あだむす聴カズ、竟ニタメニ飯館ヲ横浜ニ設ケ、幕府開港ノ止ム可ラザルヲ知リテ之ヲ許サント欲ス「中略」七月米艦ノ使節はるりす来リ、將軍ニ謁シテ貿易ノ事ヲ議セント請フ、幕府大ニ憂フ、

④はるりす益々迫ル、幕府拒ム事能ハズ、四年十月はるりす竟ニ江戸城ニ入り、將軍家定ニ謁シ、又老中ニ面シテ⁴⁴

傍線は渡来した外国使節の名、波線は軍艦を表す言葉、破線は威圧的に描かれている部分に引いた。傍線部の順から分かるように、ペリー艦隊の来航、プチャーチン (Evghii Yasilievich Putyain) の軍艦の来航、再来したペリーと副将アダムズ (Henry Adams) の渡来、ハリス (Townsend Harris) の来航という時系列の順に、日本に通商を迫ったアメリカおよびロシアの使節が記されている。

最初の破線部①からは、ペリーが「兵ヲ擁シテ脅嚇」したというように、威圧的に描かれていることが分かる。次

に、破線部②は、ロシアの使節であるプチャーチンが通商の要請と樺太の境界を定めるために来日したことが記されている。さらに、ペリー艦隊の再来における破線部③の記述には、ペリーのみならず、副将アダムズが強引な態度で幕府と交渉することを求めたことが窺える。最後の破線部④である日米修好通商条約締結時の使節ハリスについては「はるりす益々迫ル、幕府拒ム事能ハズ」というように、強硬な態度で通商を迫り、幕府に圧力をかけた人物として記されている。以上より、全ての外国使節が幕府に圧力をかけたものと描かれていることが確認できる。

また、波線で示したように、全ての渡来船に兵艦を指す「艦」という字が使用されていることから、どの船も軍艦であることが分かる。ここで章題に「黒船」という言葉があることを勘案すると、松井の言う「黒船」とはペリー艦隊のみを指すものではなく、四か国条約を締結したイギリスとオランダなどには言及がないものの、幕末期に渡来し、幕府に通商を迫った外国の軍艦の総称を述べたものと言えよう。このように、現在でこそ「黒船」はペリー艦隊のみを指す言葉として定着しているが、『日本帝国史』ではより広い意味が付されていたことがみとめられた。

なお、この用い方は、いわゆる「開国」前においてアメリカおよびロシアは通航の無い「異国」という認識から、

これを意味する近世の〈黒船〉の用例が残存していたことに起因するものと考えられる。

他に、ペリー艦隊を含めた一連の外国船を〈黒船〉と称している記述がある文献としては、衆議院議員である福田久松『大日本文明略史』（一八九二）がある。これは、神代から明治の国会開設までの歴史や、文明論を第一編から第一三編までに纏めており、近世における史実を比較的淡々と記した『日本帝国史』と異なり、社会進化論を用いて徳川幕府の政治を否定する構成となっている。この第一編「近世ノ部徳川時代」の第七章「黒船来航」に、ペリーが通商を求めて来航したこと、プチャーチンが樺太の境界決定を要求するため来航したこと、ペリーの再来の順に説明がなされている⁴⁵。先の『日本帝国史』と異なり、威圧的に交易開始を迫ったペリーの説明に特化し、プチャーチンにまつわる描写がほとんどなく、ハリスに関する記述は皆無であるものの、〈黒船〉という語が現代のようにペリー艦隊のみを指しておらず、より広い意味で使用されている点において『日本帝国史』と共通する。

同様に広義の〈黒船〉にまつわる記述がされているが、より重要なのが、考古学者の高橋健自⁴⁶等が編纂した『中等国史教科書』（一八九七）である。その第四章「黒船ノ渡来」に、次のように〈黒船〉が説明されている。『日

本帝国史』からの引用と同様に、傍線を渡来した外国使節の名、破線を威圧的に描かれている部分に引いた。

亜米利加合衆国ノ海軍提督跛理^{ペルリ}、軍艦四艘ヲ率井テ、相州浦賀ニ来リ、国書ヲ江戸ニ奉呈シテ、通商貿易ヲ乞ハント告グ、浦賀奉行戸田氏栄、我邦ノ旧例ヲ語リ、①長崎ニ於テ応接セント論セドモ聴カズ、恣ニ湾内ヲ測量シテ、戦争ノ用意ヲ為スト宣言セリ、幕府大ニ恐れ、強テ争フコトヲモナサズ「中略」魯西亞ノ水師提督布恬延^{ブグレン}モ、②軍艦ニ乗ジテ長崎ニ来リ、樺太ノ境界ヲ定メ、物貨ヲ交易センコトヲ乞ヒタリ、幕府之ニ答フルニ、樺太ノ境界ハ、詳細ニ検査シテ議定セン、互市ノコトハ、国法アリテ俄ニ改ムルハズ、天朝ニ奏上シ、諸藩ニ謀ラバ、三五年ヲ要スルナラントノ旨ヲ以テセリ「中略」同年正月、跛理再ビ軍艦六艘ヲ率井テ浦賀ニ来リ、昨年ノ答書ヲ求メタレドモ、幕府ノ容易ニ決スル事能ハザルヲ見テ、③直ニ江戸湾ニ乘リ入レ、跛理答ヲ得テ、和戦ヲ決セント迫リヌ「中略」安政三年七月、米人巴爾理斯ト云ヘルモノ下田ニ来リ「中略」④巴爾理斯ノ催促愈々急激ニシテ、若シ因循決セザル時ハ、英佛ノ二国モ或ハ来リ犯ス事アラント強迫セシカバ、幕府大ニ其所置ニ困シミタリ⁴⁷

傍線部を見ると、ここでもペリー艦隊の来航、プチャーチンの軍艦の来航、ペリー艦隊の再来、ハリスの来航という順に、日本に通商を迫った外国使節が記されており、松井広吉『日本帝国史』と同様の構成となっている。その中で、傍線部が来航した使節全てにあることから分かるように、皆威圧的な描かれ方がなされていた。よって、ここで言う〈黒船〉は、ペリー艦隊のみを示すものではなく、ペリーを中心とする幕末期に圧力を以て日本に通商を要求した外国船全般を指すと言えよう。この認識が義務教育でないものの、中学校の教科書に書かれていることから、明治三〇年当時のエリート層に普及していたことが確認できる。しかし、それ以降刊行された教科書には、中学校用の有賀長雄『国史教科書』下巻(一九〇五)を始めとして、〈黒船〉という語の例が一切確認できなかった⁴⁸。その背景としては、リース(Ludwig Riess)が伝えた実証主義を用いる歴史学の手法が教科書に反映されたことがあると考えられる⁴⁹。

以上のように広義の〈黒船〉にまつわる記述は、明治二十年代から三十年代にかけて浸透したが、先に示した『中等国史教科書』以降、ほとんど例を見ない。後にそれは、ペリー艦隊のみを指す意に収斂していくのであるが、その

嚆矢は、竹越与三郎『新日本史』が刊行された明治二四年に遡らなければならない。竹越は民友社の創立に携わった明治、大正期の歴史家であり、該書は江戸幕府の政治を否定しつつ、明治を文明が開けた時代として称える内容であった。明治二四年七月三日に初版が刊行された後、三週間も経ない内に再版され⁵⁰、さらに、その僅か二年後には第七版まで重版されている。このように短期間で版を重ねられたことから、その当時によく売れ、多くの人にその像が受容されたことが想定できる。以下、ペリーの〈黒船〉に関する記述を見よう。

外交と滅亡とは、殆ど我國民の脳中には一様の意味に解されたり。いわんや百千丈の巖のごとき四艘の黒船が浦賀に入り来るや、その義侠博愛なるワシントンの子孫が通商を求めんがために来りしものたるは、我國人の解し得ざる所なり。その煙筒は焰々として日夜煙を吐くを見たり。その砲門は凜々として人を威すがごときものあり。その劍戟は皎々として朝日に輝くものあり⁵¹。

「いわんや百千丈の巖のごとき」や、「その砲門は凜々として人を威すがごときものあり」と威圧的である一方、「そ

の剣戟は皎々として朝日に輝くものあり」のように、夜明けを連想させる表現がなされていることから、〈黒船〉がいわゆる「鎖国」をしてきた日本に渡来した「開国」の象徴として描かれたのは明らかである。この文章は、読み仮名が付されるなど多少形を変えつつも、第七版まで継続して掲載されていることから、多くの人に読まれ、その〈黒船〉像が受容されたと言えよう。

こうして『新日本史』をきっかけとして〈黒船〉という言葉に、脅威であると同時に「開国」の象徴として賛美されるべきペリー来航船という新たな意味が付与された。ベストセラーとなった該書の影響を受けてか、明治二十年代中期から四十年代（一八八七〜一九二二）にかけて、この〈黒船〉像を引き継いだ書物が次々に登場するのである。

イ 脅威と賛美が同居する〈黒船〉

賛美する内容は日清戦争（一八九四〜九五）あたりから増える傾向がある。脅威と賛美の意味合いを含む〈黒船〉という言葉にまつわる記述はその初出である『新日本史』刊行から五年後の明治二九年（一八九六）、三井銀行代表取締役を務めた米山梅吉が著した『提督彼理』により本格的に普及した。初版『提督彼理』に続き、六年後に『提督彼理』（一九〇二）を、その後『提督ペルリ』（一九二二）

を刊行したというように版を重ねたことから、多くの人に読まれた本であることが窺える。該書は上編と下編から成り、上編は主にペリーが日本に渡来した経緯を記しており、ペリーやハリスのおかげで日本は「開国」することができたという、米国使節を称える内容である。下編は主にペリーの経歴や功労が書かれている。うち、上編の第二章「日本開国の序幕」、第七章「浦賀湾内の黒船」には〈黒船〉についての記述が見られる。以下、初版『提督彼理』を用い、その二つの章を見ていきたい。

〔前編第二章「日本開国の序幕」〕

嘉永六年六月三日〓西曆千八百五十三年七月八日〓一
朶の怪雲暁に東海を掠めて相模の灘頭に下る、曙光已
に通し旭日恰も昇て再び昨日太平の乾坤を書出さんと
するの時。夷狄の黒船其數四艘相望して至る、帆を張
れども風の有無は関する所に非ず、烟を吐き濤を蹴り
泰然として八九「ノット」の速力を以て進む、天氣晴
朗一望の風未だ此時より佳なるはなく、山色水光真に
神州秀麗の氣を映射し、千秋の雪を戴る富岳は高く雲
外に睥睨す、夷使膽進て陸に近づき⁵²

ペリー艦隊渡来時の様相が、破線部のように美しい情景描

写とともに描かれている。しかし、ここで括目すべきは傍線部の「夷狄」という言葉である。これは中国を世界の中心と考え、その文化・思想が最も価値があるものであるとする中華思想において、東方の未開国を「夷」、北方のそれを「狄」といったことから、外国人を野蛮人と卑しめていう語である。このように、中華思想由来の言葉を残しつつも、米国使節の渡来を美しい情景描写をもって表現していることは興味深い。それらを踏まえた上で章題を改めて眺めると、「日本開国の序幕」とあることから、本章全体の趣旨としては、〈黒船〉を卑しめながらも、日本の「開国」の発端となったと捉えるものであると言えよう。

〔前編第七章「浦賀湾内の黒船」〕

黒船既に浦賀に入る、而して当時の光景如何は読者と共に本書の初に於て之を見たり、即ち海上の艦艦噴火山の如く立ち、其砲門を開て方に備れとも、之を指揮して平和に其使命を成就せんことを祈るの提督と、陸上の半鐘炬火騒然として眠らざるの士民とを掩ふて夜は来れり、其第二日太陽の東天に上ると共に、煙霧漸く晴れて再び水陸の風光を拭出す⁵³

傍線部における「提督」とはペリーのこと、ここで留意

すべきは、「海上の艦艦噴火山の如く立」って威圧的である一方で、「平和に其使命を成就せんことを祈る」とペリーが温和な人物として描かれている点である。これより、〈黒船〉が脅威である一方で、同時に、ペリーが日本に「開国」を齎した偉人であるという屈折した描かれ方がなされていることが分かる。以上から、この二つの章を通して〈黒船〉やペリーは、脅威を与える存在である一方で、同時に、日本を「開国」に導いた英雄として描かれていると言えよう。本書がこのようなペリー像を提示している背景には、日清戦争で勝利したことがあるようだ。というのも、外務省の官僚であった藤田四郎による序に、以下のような記述があるからである。

米諸国と修交して彼の制度文物を輸入し以て皇政維新の大業を完成し爾來兵制教育運輸交通より農工技術に至るまで彼の長を取り我の短を補ひ致々懈らず以て今日運郵を致せり彼の去歲征清の役に方り戦勝の名誉を宇内に發揚せるもの余其の決して偶然にあらざるを知る

「去歲征清の役」とは、本書刊行の前年に起っていた日清戦争のことである。つまり藤田は、欧米諸国と通商を開

始したおかげで日清戦争に勝利できたこと謳っているのである。この思想が該書におけるペリー来航や、その表象である〈黒船〉を称賛する内容に結びついているのである。

これらの他、「ペリー上陸物語」との内題を記し、その渡来を伝説と見なしている平戸大編『北米合衆国水師提督ペリー久里浜上陸誌』（一九〇二）は、

黒船ノ出現ハ幕末人士ノ心肝ヲ寒カラシメテ北辺西疆
日ニ警報、ノ急ナルヲキクニイタレリ日本ノ門戸ヲ開
クノ功ヲ己ノ手ニ収メントスル事ハ当時欧米各国ノ希
望ナリ而シテ此貴重ナル任務ハ西半球ナル一偉人ノ手
ニ委ネラレテ遂ニ平和ノ間ニ其功ヲ成ス事ヲ得タリ嘉
永六年六月九日ハ此大業ガナサレタリシ日ニシテ東方
君子国ノ青年ガ西方君子国ノ紳士ト共ニ手ヲ携ヘテ親
厚ナル交ヲ始メタル時ナリ⁵⁴

〈黒船〉の出現は「幕末人士ノ心肝ヲ寒カラシメ」たとあるが、一方で傍線部のように、日本と欧米の親交が開始したと述べている。実際に欧米各国と日本が親密な関係を築けたのかどうかはさておき、ここから、日本を「開国」させてくれたその国々との親交を深めたいという著者の願望が垣間見える。さらに、その恩人としてペリーを称えてい

ることが波線部に表れている。以上を勘案すると、「開国」の象徴としての〈黒船〉の渡来に対しては脅威の意味合いよりも、賛美する性格の方が強いようである。

上記の描かれ方がなされている〈黒船〉という言葉は明治四十年代以降もみとめられる。『中学世界』は明治から昭和初期にかけての総合的ジャーナリストである三宅雪嶺が編集に携わった雑誌であるが、以下に引用した桑原雷晏「開国始末浦賀の黒船」（『中学世界』第一五巻第一号、一九一三）においても、〈黒船〉は威圧的に描かれると同時に賛美されているのである。

三 友遠方より来る

初^{はつめ}の米^こ国^こ水^{すい}師^し提^{てい}督^{とく}ペ^ぺリ^りは旗^き艦^{かん}サ^さス^すケ^けハ^はン^んナ^な以^い下^かミ
シ^しッ^っピー^い、プ^ぷリ^りマ^まウ^うス^す、サ^さラ^らト^とガ^が等^{とう}の^の六^む隻^{せき}の^の艦^{かん}隊^{たい}を
率^{りつ}ひ^ひ、「中^{ちゆう}略^{りやく}」七^{なな}月^{がつ}八^{はち}日^{にち}即^{すなは}ち我^{わが}嘉^か永^{えい}六^{ろく}年^{ねん}の^の六^む月^{がつ}三^{さん}日^{にち}
午^ご後^ご東^{とう}京^{きやう}湾^{わん}を^を覗^{のぞ}い^て浦^{うら}賀^がに^に碇^{てい}泊^{ぱく}し^た。

黒船の影が目にとまるや、警報は連りに江戸に飛んだ。いよ／＼黒船が錨を下すと「中略」提督ペリは副官のコレナー大尉と弦門に迎接させて叫びし。米國艦隊来航の目的は薪水の御給与を仰ぐためではない。大統領ヒルモオール、ミルランドからの大切な国書捧呈の爲であるから、奉行直接に面会するか、左

もなくば江戸へ参つて直接拝謁をするという劍幕である。種々国法を説き聞かしたが承知をせぬ。長崎へ行くの、浦賀に寄せることは国禁であるのと云つた所で、升んなことは予て和蘭船から聞て居る。⁵⁵

ここで着目すべきは、章題の「友遠方より来る」である。これは論語の「子曰、学而時習之、不亦悦乎、有朋自遠方来、不亦楽乎」「中略」「子の曰く、学びて時にこれを習う。亦た悦ばしからずや。朋あり、遠方より来る。亦た樂しからずや」⁵⁶を踏まえたものだと考えられる。つまり、著者は傍線部のようにペリーを威圧的に描く一方で、ペリーが来たことを喜ばしい、歓迎すべきことと捉えているのである。このように「友」である米国使節の渡来を喜びながらも脅威として描いている点に、「黒船」は圧力をかけたが、そのおかげで日本は「開国」できたという屈折した感情が読み取れる。

以上の資料より、脅威でありつつ賛美される意味合いをもつ「黒船」という言葉は、全てペリー来航船を直接指すものであることが明らかになった。この「黒船」という語に対する屈折した認識は、先に示した明治二四年刊行の竹越与三郎『新日本史』を起点として、明治二十年代中盤から四十年代にかけて普及したと言えよう。日清・日露戦争

に勝利し脱亜入欧が叫ばれる社会の中で、ペリー艦隊のみを指して「黒船」と呼ぶようになり、それに賞賛すべき「開国」の象徴という意味を付与しはじめたのである。

ウ 賛美される「黒船」

明治四十年代以降になると、「黒船」という言葉こそ登場しないものの、ペリー艦隊を称賛する眼差しが台頭してくる。すなわち脅威の意味を排除し、賛美されるペリー来航船にまつわる記述が出現するのである。これは幕末の米国使節来航を記した上で、安政五年（一八五八）の日米修好通商条約から明治四一年（一九〇八）までの五十年間の日米関係における歴史を纏めた大日本文明協会編『日米交渉五十年史』（一九〇九）にみとめられる。

上下二千五百年の我帝国史中吾人の最も記憶すべき事三あり、一に曰神武天皇の東征、二に曰く神功皇后の征韓、三に曰く、米国水師提督ペリーの来航是なり、蓋し神武の東征は天孫人種をして此嶼蜺州の主たらしむるの端を開き、神功の討韓は大和民族をして大陸人種に接触せしむるの緒を著け、ペリーの来航は帝国をして今日あるに至らしめたる発端なればなり。⁵⁷

ペリーの渡来を歴史上重要な出来事として捉えており、そのおかげで現在の日本があるという内容である。明治四一年当時の日本は日清・日露戦争後で、産業革命が進みつつあった時代であるが、その影響があつてか、ペリー来航が「開国」の象徴として描かれていた。この凡言を始め、該書は全体として日本の近代化を齎したアメリカを賞賛する内容であつたが、その中でも、ペリーの渡来は特に賛美すべきものとして眼差された。

また、同様に脅威の意味を排除している例が、ペリーが著述した『日本遠征記』の鈴木周作訳『ペルリ提督日本遠征記』（一九二二）の序文に確認できる。

顧れば弘化嘉永の交、外船頻に北辺南陲に出没し、開国の気運は漸く塾せしと雖も、真に親通商を眼目とし、平和と新厚とを以て我に臨みし北米合衆国のごとくもその他に其の国ありしか。或は恐る、常時若し敵意ある他国の来つて、初めて我鎖国の鍵に手を触れなば、急転打撃、兵火入り、遂に及ぶ可からざるの条件を以て国を開くの巴むを得ざるに至りしを。然るに事茲に至らずして、浦賀の砲声は日本開国の第一祝砲となり、神奈川条約亦其の先驅となり、是より瀛西の文物陸續として入り来り、遂に今日の国運隆々の素因をなしし

もの、此の点に於て吾人日本国民が合衆国に負ふ所亦
尠少ならずと謂ふべし

傍線部より、ペリーを派遣し、日本を「開国」させてくれたアメリカのおかげで、近代化を進めることができたという思いが読み取れる。特に「浦賀の砲声は日本開国の第一祝砲となり」との表現がなされ、ペリー艦隊の渡来が祝うべき文明の夜明けと捉えられていることは注目に値する。以上のように、『日本遠征記』序文や『日米交渉五十年史』を契機とし、ペリー艦隊への眼差しが称賛を帯びたものとなり、それに伴つて「黒船」も同様の意識で描かれるようになるのである。

完全に脅威の意味を排除し、ペリー艦隊を「黒船」という言葉を用いて賛美しているものの初出は、日本陸軍の軍属であつた櫻井省三の演説を記録した『黒船艦隊渡来の真相』（一九一三）と見られる。櫻井は次のように述べている。

終に目的地なる浦賀沖に到着せり、此日は海上霧深くして咫尺を弁ぜざりしが、艦隊投 錨の頃に到り、恰も霧霽れて湾内晴朗、俄然四隻の黒船の湾内に並列するを見る⁵⁸

「海上霧深くして」と、いわゆる「鎖国」をして先行きが見えなかった日本を、ペリー艦隊が文明の光に導くことで「霧霽れて湾内晴朗」にしたことから、「黒船」が「開国」の象徴として描かれていることが確認できる。また、それは以下の文章にも表れている。

浦賀の砲声は日本開国の第一祝砲となり、是れより泰西の文化は恰も水の卑きに就くが如く、滔々として輸入され、遂に今日に於ける国運隆昌の素因をなし、もの、これ米国の賜と云はんも、強ち不当にあらざらん、此の点に於て吾人日本国民が合衆国に負ふ所亦尠少ならずと謂ふべし、爾来米国人は常に我に同情を寄せ、吾人も亦米国に対して夙夜感謝の意を表するは、即ち之が為めなり⁵⁹

先に紹介した『ペリリ提督日本遠征記』序と同様の「浦賀の砲声は日本開国の第一祝砲となり」という表現があることから、本書でもペリー来航船の渡来が喜ばしいものとされていることは明らかである。しかし、ここでは「米国の賜と云はんも、強ち不当にあらざらん」という文に留意すべきである。日本の「開国」やそれに伴う発展は、日本自身によるものではないという認識が垣間見えるのである。

同様に称賛されているが、より重要なのが、川副佳一郎『国民の新智識アメリカ講話』（一九一九）である。本書は、アメリカの建国以降の歴史を中心に、地理、物語等を編集した書物であるが、その「はしがき」に次のような記述がみとめられる。

由来アメリカは自由の国、工芸の国、発明の国であります。日本の国民が、アメリカの歴史によつて、乃至アメリカの国民に依つて教えられる、ことは、決して少くはないと思ひます。現に、日本今日の文明が、嘉永年間⁶⁰に於けるペリリの浦賀訪問に負ふ所の大きな一事は、何人も認めて疑はない事実であります。

ペリーを派遣し、日本を近代化へ導いてくれたアメリカを賛美する内容であるが、特に傍線部から「開国」の発端を齎した人物としてペリーを称賛していることが分かる。また、次の第二三章「ペリリの黒船」には以下のように（「黒船」に関する記述がある）。

アメリカ合衆国の提督ペリリが、黒船数艘を引きつれて、浦賀の港へ参りました一事が、日本をして今日ならしむる糸口となつた事実⁶¹は、皆さん御存知の通りで

傍線部の記述から、ペリーのおかげで日本は文明国となったという認識が人口に膾炙していたことが窺える。このように、大正期にはペリーの威圧的な面が排除され、日本を近代化へ導いてくれた英雄であるとみなすと共に、〈黒船〉という言葉は賛美すべき「開国」の象徴として普及したと言えよう。しかし、ここで留意しなければならぬのは、米国使節であるペリーが「日本をして今日（こゝろ）ならしむる」と捉えており、日本自身で「開国」した訳ではないという認識がある点である。賛美しながらも劣等感を抱くというこの屈折した感情が、〈黒船〉という言葉の背後にあると見ることができよう。

ただし、大正期に入ってから賛美する記述一色に染まった訳ではなく、矢野道雄『日本全史』は、再び〈黒船〉を脅威として捉え、ペリー艦隊以外にも日本に「開国」を迫った外国船の総称として描いている⁶²。このような例外はあるが、大正期には脅威としての描かれ方は陰を潜めており、該書を除いて見受けられなかった。さらに、脅威と賛美の意味を含む〈黒船〉の記述も見当たらなかったことから、当時は脅威の意味を排除し、賛美する描き方が主流であったと考えられる。

これより、「脅威としての〈黒船〉」、「脅威と賛美が同居する〈黒船〉」、「賛美される〈黒船〉」の順に新たな描き方が現れるが、それらを変遷するのではなく、主流を変えつつ併存していたと見ることができよう。

(2) 學術用語としての〈黒船〉

ところで〈黒船〉と呼称されず、一見、何の意味も付されていないように見えるペリー来航船の記述もある。帝国大学兼陸軍教授を務めた歴史学者内藤耻叟を始めとする国史学者が校訂に携わった小林鐵之輔『大日本帝国全史』（一八九二）には、〈黒船〉と書かれていない⁶³。第二高等学校教授で、歴史学者である齋藤阿具が著した『西力東侵史』（一八九八）にも、〈黒船〉でなく、「軍艦」と表記されている⁶⁴。また、日本歴史地理学会編『日本海上史論』（一九二一）は、文科大学教授の辻善之助や京都帝国大学文科大学教授の内田銀蔵といった当時一流の国史学者の諸論考から成るが、該書においても〈黒船〉の記述はない。以下のように、「蒸気船」や「汽船」というようにペリー来航船が表現されているのである。

西暦一八四四年のことであるから、汽船大洋航行の時代が實際始まつてから、間もないことである、日本の

識者の一分に於ては、それよりして世界はまた昔の世界でないことを臆気ながら感ずるやうになつた。所へ「ペルリ」が来た。威風堂々として来た、さうして蒸気船の如何なるものなるかを実物によつて示した。幕末当路の政治家が開国を取てすることに決意したのは、色々の因由あつてのことでありませうが、此の汽船航行の実現によつて、世界交通の有様が変り、最早ドウとしても永く旧慣を墨守する訳には参らぬと自覚したことも、与つて頗る力あることと認められます⁶⁵

時代が下つて、東京帝国大学国史学科教授の中村孝也が著した『江戸幕府鎖国史論』（一九一四）は、「米使の渡来せる⁶⁶」とのみ書かれており、これにも〈黒船〉は登場しない。以上のように、国史学者が著した歴史書には〈黒船〉という表記がなく、ペリー艦隊についても特に意味が付されている訳ではなかつた。このように、国史学者の著した国史学に〈黒船〉という言葉の例がないと共に、ペリー艦隊が意味付けされることなく、淡々と記述されていることから、語としての〈黒船〉は国史学における学術用語ではなかつたと言えよう。

その背景には、近代の国史学が史料批判を重視するヨーロッパ近代歴史学の手法を取り入れたことがある。この手

法は、明治二〇年（一八八七）二月にドイツ帝国より帝国大学に招聘されたリースが伝えた実証主義を用いる方法である。以前から日本には史料批判を基に歴史を叙述しようとする動きがあつたものの⁶⁷、リースが帝国大学文科大学に創設された史学科の中心者となつたことにより、本格的に一次史料を基に叙述する歴史科学が移入された。その二年後の六月には同大学に国史学科が創設され、続いてその五か月後に史学会がリースの指導により設置されたこと⁶⁸、文献実証主義を取り入れることが歴史学における最新の研究方法として認知され始めた。つまり、ペリー来航にまつわる一次史料に〈黒船〉という語が認められない以上、国史学者がこの言葉を学術用語として使用することはなかつたのである。〈黒船〉という語を歴史の描写に持ち出し、さらに意味付けまで行つたのは、アカデミズムに携わる人を除いた近代〈日本人〉であつたのである。

おわりに

明治二二年から二四年（一八八九―九一）に上梓された『言海』に〈黒船〉という言葉を繙いたところ、そこには南蛮船など江戸時代以前の諸外国の大型船を意味する説明のみが認められ、ペリー来航船を指す現在のような記述は確認できなかつた。そこで、本論文では、〈黒船〉という

語がペリー艦隊を指すようになる時期とその理由を明らかにすることを目的とし、それを解決する手段としてこの言葉を巡るイメージの変遷に着目しつつ分析を行った。

〈黒船〉という言葉の最も早い時期の用例としては、豊臣秀吉が発布した「伴天連追放令」(一五八七)が挙げられ、浸水や腐食を防ぐためのピッチが塗られた、船体が黒い南蛮船を指した。しかし、正保四年のポルトガル船来航航海事件を境に、語としての〈黒船〉の使用は減少したが、使用例からは、南蛮船という従来の語義と並行して、通航の無い「異国船」を含む言葉に変化した可能性がみとめられた。

上記の語の使用状況はペリー艦隊が来航した時代も変わらず、公文書や、書簡、日記、そして庶民に享受された瓦版にも、ペリー来航船を指す言葉としての〈黒船〉は登場しない。つまり、前時代から〈黒船〉という言葉が存在し、また、ペリー艦隊の船体にはいずれも浸水・腐食防止用のチャンが塗られ黒色であったにも関わらず、幕末の時点では公にも庶民にもペリー来航船が〈黒船〉と称されていなかったのである。

幕末や明治初期において大々的に用いられることになかった〈黒船〉という言葉がするのは、明治二二年(一八八九)刊行の松井広吉『日本帝国史』であるが、ここでは、日本に圧力をかけて「開国」を要求した一連の外

国の軍艦を総じて言うものであり、ペリー艦隊を直接指すものではなかった。また、義務教育ではないものの、明治三〇年(一八九七)刊行の中学校用の教科書にも同義の〈黒船〉という言葉が記載されたことから、これが明治三〇年当時のエリート層に普及した〈黒船〉という言葉における共通の認識であったと見られる。ただし、これ以降に刊行された教科書には、その言葉が一切みとめられない。後に文献実証主義の手法を取り入れた歴史学の成果が教科書に反映されたことが、その理由だと考えられる。

ペリー艦隊のみを指して〈黒船〉と称する文献の初出は、明治二四年(一八九一)刊行の竹越与三郎『新日本史』である。本書における〈黒船〉という言葉は、脅威の意味を残しつつも、ペリー来航船を開国の象徴として賛美するものであった。また、短期間に版を七回も重ねるほど人気を博したことから、多くの人々がこの〈黒船〉像を受容したと言える。こういった称賛の眼差しは日清戦争(一八九四〜九五)あたりから増加する傾向があり、米山梅吉『提督彼理』(一八九六)により本格的に普及し、〈黒船〉の描かれ方の主流を占めていく。

以上のようにペリー来航を描くようになった背景には、一つは、明治維新から二十年以上が経過し、幕末に対して距離がとれるようになったことにより、江戸時代を過去の

時代として論じることができるようになったことが考えられる。そして今一つは、日本が日清・日露戦争に勝利し、西洋を範として帝国主義を推進する中で、「劣った」近世に終止符を打った祝福すべき近代化の表象として〈黒船〉という言葉を用いることで、ペリー来航に「開国」の象徴としての意味をもたせたのである。

明治四十年代になると、大日本文明協会編『日米交渉五十年史』（一九〇九）や鈴木周作訳『日本遠征記』（一九二二）の序文で、脅威の意味を排除し、賛美されているペリー艦隊にまつわる記述が出現したことを契機に、同様の描かれ方がなされている〈黒船〉が登場し、大正期に普及した。これらは一見、〈黒船〉来航を近代化の発端として単に称えているだけのものに見えるが、実は同時に日本自身で「開国」できなかつたことに対する劣等意識を内包するものであった。このような描き方が主流であるが、一部例外も確認できたことから、「脅威としての〈黒船〉」、「脅威と賛美が同居する〈黒船〉」、「賛美される〈黒船〉」が順に現れ、新たな描かれ方を加えつつ、併存していたと見ることができるところが、興味深いことに、〈黒船〉という言葉は国史学者による学術用語として扱われなかつた。その背景には歴史学が近代的学問に脱却したことがあり、すなわち、歴

史学者リースが実証主義の手法を取り入れた科学としての歴史学を伝え、国史学者もその手法を基に歴史叙述をするようになったことで、一次史料に現れない〈黒船〉という言葉はアカデミズムには定着しえなかつたのである。ここにおいて〈黒船〉は、いわば学問に携わる者以外の人々が創造した物語と言え、近代日本の移り行く社会や対外関係を背景に、近代における人々のメンタリティーが投影された言説だと言える。西洋を範として脱亜入欧を叫び、明治新時代を称賛する中で、近世を「鎖国」したために遅れた時代と見なし、そこから脱却しようとする近代〈日本人〉の精神性が⁶⁹、〈黒船〉という言葉にその鎖を打ち砕いた「開国」⁷⁰の象徴という意味を与えたのである。

注

- 1 司馬遼太郎『竜馬がゆく』（『司馬遼太郎全集』第三卷、文芸春秋、一九九六年第七刷）【初版一九七二年】、六〇～六一頁。
- 2 島崎藤村『夜明け前』第一部（上）新潮社、二〇〇八年第八八刷（初版一九五四年）、二四頁。
- 3 手塚治虫『陽だまりの樹』第二卷、小学館、一九九三年第一三刷（初版一九八九年）、一八九～一九三頁。
- 4 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第一卷、加藤栄一「伴天連追放令」項、六三二頁。

- 5 松浦家文書、松浦史料博物館蔵(安野眞幸『パテレン追放令』、日本エディタースクール出版部、一九八九年)、二二四頁。以下、全ての読点、句点、傍線は筆者が付け加えた。また、引用文中における旧字体は、新字体に改めた。
- 6 清水紘一、木崎弘美、柳田光弘「他」編『近世長崎法制史料集』一、天正八年〜享保元年、岩田書院、二〇一四年、五四頁。
- 7 前掲『近世長崎法制史料集』一、九四頁。
- 8 前掲『近世長崎法制史料集』一、五四頁。
- 9 『犬子集』巻第五、秋下(森川昭「他」編『初期俳諧集』新日本古典文学大系六九、岩波書店、一九九一年)、九八〜九九頁。
- 10 正保四年のポルトガル船来航事件を記録したものは、「通航一覽」の他、長崎聖堂書記役の田邊八右衛門茂吉が編集し、明和元年に長崎奉行へ献上した「長崎実録大成」がある。「長崎実録大成」は同年六月二四日に長崎へ南蛮船二艘が入港したことを記録していることから、明らかに同事件のことであると見られる。ただし、「通航一覽」と異なり、ポルトガル船が(黒船)でなく、「南蛮船」と表記されている。(田邊八右衛門茂吉編『長崎実録大成』第七卷(丹羽漢吉、森永種夫校訂『長崎実録大成』正編、長崎文献叢書第一集・第二卷、一八六〜一八七頁)。
- 11 長崎県史編集委員会編『長崎県史』対外交渉編、吉川弘文館、一九八六年、二二三頁。
- 12 前掲『長崎県史』対外交渉編、二二七頁。
- 13 山本博文「外交としての鎖国」―なぜ二百年以上の平和が可能だったのか―、NHK出版、二〇一三年、一三三頁。
- 14 林燿「通航一覽」、一八五三年(早川純三郎編兼発行『通航一覽』第五、図書刊行社、一九一三年)、緒言。
- 15 前掲林燿「通航一覽」巻之百八十六、六〇頁。
- 16 河村瑛子「古俳諧の異国観―南蛮・黒船・いぎりす・おらんだ考」(『国語国文』第八三〜一四四頁)。河村によると、南蛮貿易を行っていた時代に、南蛮船としての(黒船)は鉄砲を有していたことから脅威と認識されたところがあるが、必ずしもそうとは言えない。というのは、南蛮貿易において戦国大名は積極的に鉄砲を輸入し、用いていたからである。また、島原・天草一揆(一六三七〜三八)においては、幕府側が原城攻略のためにオランダから白砲を借用しており、また、豊臣秀吉によるいわゆる「刀狩令」発布以降も、近世の農民は害獣の駆除のために鉄砲を所持していた形跡がある。
- 17 林子平原著、村岡典嗣校訂『海国兵談』、岩波書店、二〇〇九年第四刷(初版一九三九年)、一九頁。
- 18 京都町触研究会『京都町触集成』第一二巻、岩波書店、一九九五年第二刷(初版一九八六年)。近世史料研究会編『江戸町触集成』第一六巻(自嘉永三年至安政二年)、塙書房、二〇〇一年。石井良助、服藤弘司編『幕末御触書集成』第一〜五巻、岩波書店、一九九四年。黒羽兵治郎編『大坂町奉行所御触書総目録』、清文堂出版、一九七四年参照。
- 19 一八五三〜一八五五年(嘉永六〜安政二) 永青文庫所蔵、熊本大学付属図書館寄託(熊本県立美術館編『横井湘南と小河一敏―新出書簡を読み解く―』、土佐の龍馬、肥後の小楠展実行委員会、二〇一七年)、三一頁。
- 20 戸田氏栄は弘化四年(一八四七)に浦賀奉行となった後、嘉

- 永六年（一八五三）ペリー来航の際、首席全権となる。大垣藩から小原鉄心の斡旋で兵一三〇人を率いて国書の交換をした。（横山住雄『戸田氏秀』項、安岡昭男編『幕末維新大人名事典』下巻、新人物往来社、二〇一〇年、一五六―一五七頁）。
- 21 井戸鉄太郎宛書簡集「南浦書信」乾坤、一八五三年四月、二月、東京大学史料編纂所蔵（浦賀近世史研究会監修『南浦書信』、未來社、二〇〇二年、六三―六四頁）。
- 「南浦書信」は、ペリーの浦賀来航直前の嘉永六年四月晦日から一二月一二日にわたる（途中脱けている日あり）同地奉行戸田伊豆守氏栄の在府奉行井戸鉄太郎（石見守弘道）への私信集である。この書簡は両奉行の公文書ではなく、戸田から井戸への私的な手紙であるという。南浦書信の原本所在は不明だが、該書で紹介する乾坤二巻は、大正三年に鉄太郎の孫に当る達夫宅にあったものを、東大史料編纂所々員が筆写したもので、一九九九年に発見され、解説された。乾は四月から七月、坤は一月から二月の書簡が収められている。（前掲『南浦書信』、一六三頁）。
- 22 野島家文書（宮地佐一郎『龍馬の手紙』坂本龍馬全書簡集・関係文書・詠草、PHP研究所、一九九五年）。
- 23 上田万年監修『国学者伝記集成』第二巻、名著刊行会、一九七八年、「色川三中」項、一二九六―一三〇〇頁。
- 24 古川貞次、大曾根章介「他」編『国書人名辞典』第一巻、岩波書店、一九九三年、「橘守部」項、一九七頁。
- 25 色川三中「片葉雜記」（中井信彦校注、色川三中著『片葉雜記』色川三中黒船風聞記、慶友社、一九八六年）、一五頁。
- 26 「米艦渡来紀念図」一卷、横浜開港資料館所蔵（熊本県立美術館編『横井湘南と小河一敏―新出書簡を読み解く―』、土佐の龍馬、肥後の小楠展実行委員会、二〇一七年）、二二頁。
- 27 「海陸御固場所附」神奈川県立博物館蔵、（神奈川県立歴史博物館蔵『黒船』、神奈川県立歴史博物館、二〇〇三年）、二四頁。
- 28 「浦賀紀行図」二巻、真田宝物館蔵（前掲、『黒船』、二六頁）。
- 29 「ペリー浦賀来航図」一卷二図、井伊家彦根藩文書、彦根博物館蔵（前掲『黒船』、二四頁）。
- 30 「外戎記聞」高田藩榎原家史料蔵（田中葉子、齋藤純編『浦賀大変！かわら版にみる黒船来航』、浦賀研究所、二〇一四年）、五頁。
- 31 「蒸気船の図」横浜市中央図書館蔵（前掲『浦賀大変！かわら版にみる黒船来航』、一一頁）。
- 32 「異国船渡来記神洲泰平鑑」印刷博物館蔵（印刷博物館編『西洋が伝えた日本／日本が描いた異国』、凸版印刷印刷博物館、二〇〇四年）、一〇八頁。
- 33 「異国船帰帆の図并魚之図」東京大学史料編纂所蔵（前掲『浦賀大変！かわら版にみる黒船来航』、四五頁）。
- 34 「『ペリー来航関係瓦版綴り』」二丁表に「火輪船」、「蒸気船之図」（横浜市中央図書館蔵）に「上気船」とある。また、その他にペリー来航船を描いた瓦版には、「アメリカ蒸気船之図」（品川歴史博物館蔵）や「亜米利加シヤウキ船 海岸御固図」（品川歴史博物館蔵）があるが、いずれにも「黒船」という表記は見られなかった。
- 35 西川武臣『ペリー来航』、中央公論新社、二〇一六年、

一四〇頁。

36 「[異国船渡来に付江戸町火消駆付場所達書]」東京大学史料編纂所蔵〔浦賀大麥一かわら版にみる黒船来航〕、三七頁。

37 有名な狂歌「泰平のぬむりをさます正喜撰たつた四はいで夜もねられず」は、三谷博『明治維新とナシヨナリズム』（一九九七年）における第三章の注一にて、三谷が「泰平の……」と時代全体を外から見ていることが指摘し、明治以降の作ではないかという説を提唱して以降、それが有力な説と見なされている。よって、それを踏まえて本稿では上記の狂歌は扱わないこととする。

38 日本古典籍総合目録データベースや国会図書館の目録などで、「黒船」を題名に含んだ幕末の資料名が検索できるが、これらの表題は後世に付されたものであり、ペリーが渡来した同時代に付されたものではない。

39 西周「人世三宝説 三」（『明六雑誌』第四〇号所収、一八七五年八月刊行）。

40 明治一八年校訂の写本「黒船燻沈記」は『日本帝国史』以前の文献であり、「黒船」をクロフネと読む可能性があるが、確定は出来ない。なお、内容は慶長一四年（一六〇九）に有馬晴信が長崎港内にポルトガルの商船を沈めたことが描かれており、「黒船」は明らかに南蛮船を指している。ただし、原著の成立年代が不明であるため、本稿では考察の対象としない。

41 松井広吉『四十五年記者生活』、博文館、一九二九年、二頁。

42 前掲松井広吉『四十五年記者生活』、七八〜二六三頁。

43 松井広吉『日本帝国史』（博文館、一八八九年）の校閲者は、

後に実証主義の方法を用いて歴史学を研究する内藤耻叟ではあるが、この書が刊行された明治二二年は帝国大学に国史学科が創設された年に該当するので、内藤がこの時最新の文献実証学を修得し、その眼をもって校閲したとは考え難い。よって、ここでは一次史料にない「黒船」という言葉が登場するのであろう。

44 前掲松井広吉『日本帝国史』、三三二〜三三四頁。

45 福田久松『大日本文明略史』、福田久松、一八九一年、二六六〜二六九頁。

46 高橋健自（一八七二〜一九二九年）は明治から昭和時代前期にかけて活躍した考古学者。銅銚・銅劍の研究によって京都帝国大学より文学博士の学位を得た。『銅銚銅劍の研究』（一九二五年）などの著作は、日本考古学の基本的業績として有名である。（『国史大辞典編集委員会編』『国史大辞典』第九巻、一九八八年、坂詰秀一「高橋健自」項、五八頁）。

47 高橋健自、武谷等編『中等国史教科書』、東京図書出版、一八九七年、二二六〜二二七頁。

48 「黒船」という言葉が登場しない教科書としては、他に、伊勢椿時中編『小学国史紀事本末』巻下、龍雲堂（一八八一年）や、大槻文彦『校正日本小史』下、柳原喜兵衛「他」（一八八二年）、山縣悌三郎『小学校用日本歴史』、山縣悌三郎（一八八八年）、普及舎編集所編『小学国史』巻三、普及舎編集所（一九〇〇年）、原秀四郎『中等国史教科書』、博文館（一九〇七年）の第一学年用と第二学年用、高等女学校用の市川源三「他」『国史教科書』下巻、国光社（一九〇七年）などがある。また、文部

省『小学日本歴史』二、文部省（一九〇四年）や、『尋常小学日本歴史』二（一九一〇年）、文部省『尋常国史教科書』下巻、文部省（一九二二年）などといった国定歴史教科書にも『黒船』という語は確認できなかった。

49 前掲『中等国史教科書』（一八九七年）以降の教科書に（黒船）が消えた理由は、『中等国史教科書』（一八九七年）出版当初は、一次史料を基に叙述する実証主義の方法が教科書に反映されていなかったが、以降はその手法が教科書に反映されたからだと考えられる。第二章二節参照。

50 竹越与三郎『新日本史』上巻、第四版、民友社、一八九一年、裏表紙裏。なお、初版から第三版は現存状況が不明であるため、初版と同年に刊行された第四版を使用する。

51 前掲竹越与三郎『新日本史』上巻、一七頁。

52 米山梅吉『提督彼理』、博文館、一八九六年、前編七頁。

53 前掲米山梅吉『提督彼理』、三四〜三五頁。

54 平戸大編『北米合衆国水師提督ペルリ久里浜上陸誌』、原田印刷、一九〇一年、一〜二頁。

55 桑原雷晏「開国始末浦賀の黒船」（三宅雪嶺、牧野伸顕〔他〕編『中学世界』第一五巻第一号、博文社、一九二二年）、二〇〜二二頁。

56 孔子原著、金谷治訳注『論語』、岩波書店、一九九八年第五九刷（初版一九六三年）、一七頁。

57 大日本文明協会編『日米交渉五十年史』、大日本文明協会、一九〇九年、一頁。

58 櫻井省三講話『黒船艦隊渡来の真相』、「出版社不明」、

一九一三年四月、六頁。

59 前掲櫻井省三『黒船艦隊渡来の真相』、一二頁。

60 川副佳一郎『国民の新智識アメリカ講話』、東京出版月報社、一九一九年、はしがき。

61 前掲川副佳一郎『国民の新智識アメリカ講話』、八四〜八七頁。

62 矢野道雄『日本全史』地、第一三編『維新史』第一章「黒船の出没と国論の沸騰」、帝国史書研究会、一九一六年、四二三頁。

63 小林鐵之輔『大日本帝国全史』上之巻、杉本七百丸、一八九二年、二二二頁。内藤耻叟、井上哲次郎、南條文雄、山田喜之助、有賀長雄が校訂に携わった。

64 齋藤阿具『西力東侵史』、金港堂書籍、一八九八年、一八九頁。

65 内田銀蔵『世界体勢の推移と開国』（日本歴史地理学会編『日本海上史論』、三省堂、一九二一年）、三一四〜三一五頁。

66 中村孝也『江戸幕府鎖国史論』、奉公会、一九四九年、七頁。

67 修史局副長の重野安繹（一八二七〜一九一〇年）は、厳しい史料批判と伝承的史実の抹殺を行う合理的実証主義の立場であった。（永原慶二『20世紀日本の歴史学』、吉川弘文館、二〇〇三年、一四頁）。

68 明治二一年（一八八八年）、リースは渡辺洪基総長の諮問を受け、国史学科新設に関する意見書を提出（古文書学・歴史地理学等の補助学学習の要、ヨーロッパ風の実証主義歴史学の樹立、研究室設置の要、ハーグ図書館所蔵の和蘭出島蘭館日誌や往復文書の翻訳の要等を勧告）し、国史学科の振興に貢献した。（重野安繹〔他〕『明治史論集』二、一九七六年、四四四〜

四四五頁)。

69 大島明秀『鎖国』という言説―ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖

国論』の受容史―』、ミネルヴァ書房、二〇〇九年、二二―八頁。

70 「開国」もまた明治二〇年代以降に浸透した言説で、「国の開

鎖」を指すのみならず、この言葉には(「文明の度合い」)に関する

眼差しも含まれている。大島明秀「開国」概念の検討―言

説論の視座から―』(『国文研究』第五五号、二〇一〇年所収)、

二九―三〇頁。荒野泰典「近世の国際関係と「鎖国・開国」言

説―19世紀のアジアと日本、何がどう変わったのか―』(『比較

日本学教育研究センター研究年報』第一一号、二〇一五年所

収)など。